



指揮者のタクトに合わせて、音も心もひとつにして演奏の完成度を上げていきます

表通り裏通り

全日本吹奏楽コンクールに向けて



常任指揮者の佐藤さん

川越奏和奏友会吹奏楽団は、広く市民が参加できる吹奏楽団として、昭和五十二年に発足。小中学校からの依頼演奏など、地域に根ざした活動をはじめ、定期演奏会や吹奏楽コンクールにも参加。10月に開催される、全日本吹奏楽コンクールでの金賞を目指します。

「もう一度ははじめから!!」と指揮者・佐藤正人さんの厳しい声が場内に響きます。出だしの音の強弱、合奏のタイミングなど、わずかな違いに細かく指示が飛び、全員が納得いくまで繰り返します。

川越第一中学校吹奏楽部の卒業生約四十人が集まり、はじめたのがきっかけ。発足してから数年がたつと、仕事や家庭の事情などから、本格的な活動ができないこともありました。

転機となったのは、平成2年に指揮者として佐藤さんを迎えてから。楽団の技術は飛躍的に向上しました。県や西関東の大会に毎年のように出場し、全国大会でも金賞を受賞するようになりました。

現在、メンバーは約七十人。教師、住職、看護師などさまざまな職業の音楽好きが集まり、毎週土曜日と日曜日、北部地域ふれあいセンターなどで練習しています。クラシックを中心に、童謡、ポピュラーなど幅広い楽曲を手掛けています。



「メンバーは、仕事や家庭の都合をあわせ、練習に参加しています。全員そろっての練習は、なかなかできないので苦労しています」と副団長の福田彩子さん(今成四丁目)。

団の自慢は、聴いている人が気持ち良いと感じてもらえる、重厚かつクリアーな音色。

「皆でひとつの音楽を作り上げ、演奏会でうまく演奏できたときは、達成感でいっぱいになります。そして何より、その時いただく拍手が一番うれしいですね」と団長の石川龍彦さん。

10月、名古屋市中で行われる全日本吹奏楽コンクールの職場・一般の部に西関東代表として出場。総勢二十五団体が演奏を競い合います。「目標は、金賞です」と石川さんは力強く話してくれました。

トーク 109 パレット

まちのできごと
川越市の面積は 109.16 km²



「畑仕事が好き」と粕谷さん

2人合わせて211歳!

現在の市内最高齢者は、女性が107歳の粕谷リエさん(古谷本郷)、男性が104歳の齊藤邦藏さん(寺山)。



「目も良く見え歯も丈夫」な齊藤さん

9月19日(土)、長寿を記念して、川合善明川越市長が2人の自宅を訪問し、記念品を手渡しました。「お2人とも、100歳を過ぎてこれだけ元気でいられるのはすごいですね。あやかりたいです」と川合市長。



最初の作業は80mにも及ぶ夫がかりなもの

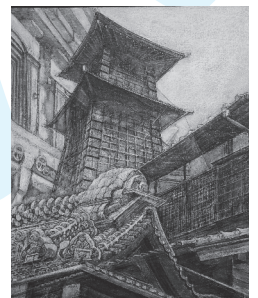
70人で曳き綱を新調

岐阜県・飛騨での修理を終え、3年ぶりに戻ってくる松江町2丁目の山車を迎えようと、9月26日(土)に曳き綱が作られました。松江町2丁目と、山車所有の近隣町内の皆さん約70人が鏡山酒蔵跡地に集結。装置の3か所に3本ずつ荒縄を結び、一度により上げます。仕上がった3本の綱にそれぞれ赤・白・緑の布を巻き付けます。最後にそれらをまとめ、直径約6cm、長さ35mの1本の綱ができあがります。完成まで約3時間。「山車の化粧幕に使われた緑色を綱にも取り入れました。新しくなった山車とともに、ぜひ見に来てください」と松江町2丁目自治会長・西澤堅さん(69歳)。

全国から461点の応募

今回で4回目となった「川越を描くビエンナーレ」。回を重ねるごとに、全国から力作が応募されてきます。大賞に選ばれたのは、半山修平さん(狭山市)が描いた、「小江戸川越II」。

「川越には魅力的な場所がたくさんありますね。その中で、川越の象徴である、時の鐘と蔵造りの建物などを描きたかった。静かな雰囲気と、街が歩んできた歳月を表現しました」と半山さん。30号(約縦90cm×横70cm)のこの作品は、川越市に寄贈されました。



将来の夢を尋ねると「まだ分かりませんが、大好きな柔道を続けることが、今は楽しいです」とさわやかな笑顔で話してくれました。

中学1・2年生の時は、全国大会出場権をかけた県大会の決勝戦で敗れ、悔しい思いをしました。そこで「今年こそは、全国大会へ」と気持ちを込めて、練習に打ち込みました。柔道を続けてきたことで身に付いたことは、我慢強さと集中力。得意技は大内刈り。全国大会の二回戦では、一緒に練習したことのある強豪の大阪府代表と対戦。ここで、「自分の柔道をやるぞ」との集中力が勝利につながり、この後の対戦も有利に戦えました。

「優勝が決まった時、コーチと抱きあつて喜びました」。名細中学校3年生の荻野さんは、沖縄県で開催された、全国中学校柔道大会に出場し、初優勝を勝ち取りました。祖父や両親も柔道経験のある柔道一家に生まれ、2歳のころから柔道着をまとい、小学校から本格的に習い始めました。コーチはお母さん。「練習の時はとても厳しく、怒られてばかり」と荻野さん。

荻野香澄さん



58